
Role Playing Girl!!

なべしき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Role Playing Girl!!

【Nコード】

N2225Z

【作者名】

なべしき

【あらすじ】

押入れを開けたら、ウバメの森でした 迷い込んだ世界は、人間とモンスターが一緒に暮らす世界。 草むらから飛び出してきた巨大な芋虫に涙目になったり、黄色いエイリアンみたいなモンスターと仲良くなったり、茶色くてふわふわしたえりまきのかわいいやつにはそっぽを向かれたりする、ポケモンを知らない主人公の異世界トリップ。 以前サイトに載せていたネタの再掲載です

ウバメのもり

遊びにきた親戚の男の子（たっくん。5才）の子守りをするこ
なつた。

おねえちゃんかくれんぼしようとせがまれたのでとりあえず押し入
れの中に隠れたが、いくら待てども鬼のたっくんは捜しに来なかつ
た。

痺れを切らせて押し入れの戸を開けて、絶句した。

森だ。

何故かわたしは鬱蒼と木々の生い茂る森の中にいた。いや、正確に
は森の中にある小さな古びた祠の中で体育座りしたまま固まってい
た。

罰当たりなのでとりあえず祠から出て森を歩いてみることにした。
が、五分もしないうちに後悔した。

森には見たこともないような巨大な芋虫や巨大な蛾のような生き物
がうじゃうじゃいたのだ。草むらから緑色の芋虫やら蛹やらが飛び
出してくるたびに情けない悲鳴をあげる。

すっかり涙目になっていたところに、大きな麦わら帽子をかぶって
虫取り網を持った少年が現れた。救世主の登場である。少年はわた
しにスプレーのようなものをかけると、森の出口まで案内してくれ
た。

「キヤタピーにビビって泣くなんて姉ちゃんだっせー！」

少年はわたしの話を聞いて笑っていたがわたしにしてみたら全然笑
いごとじゃない。あんな巨大な芋虫、常識的に考えてあり得ない。
ビクビクしながら少年の道案内に従うが、不思議なことに、少年と

一緒に歩いているとキヤタピーという名前らしい巨大な芋虫も、トランセルというらしい蛹も飛び出してこなかった。少年曰わくさつきわたしにかけてくれた『むしよけスプレー』のおかげらしい。

「姉ちゃん、むしよけスプレーも知らないの？」

むしよけスプレーどころか、ここがどこかも知らない。

34 ばんどうろ

森の出口で少年にお礼を言って別れた。森を抜けると開けた道に出た。ハイキングでもできそうなくらい緑豊かで、ボーイスカウトのような格好をした子どもたちの姿もあった。光があまり届かない薄暗い森の中からは分からなかったが、外はとてもいい天気だった。ここはどこなのだろう。

民家の前に優しそうなおじいさんが立っていたので道を尋ねると、わざわざ家の中に戻って地図を持ってきてくれた。

これで自分のいる場所がわかると喜んだが、すぐにその希望は消えた。地図に記されている地形も地名もわたしの記憶にあるものとは大きく異なっていたのだ。タウンマップを握りしめて呆然としてみると、おじいさんが申し訳なさそうに言った。

「すまんが、カントー地方のタウンマップは持ってなくてのお……」

関東地方？聞き覚えのある単語にわたしの胸に希望が生まれた。真っ暗だった目の前が明るい光で照らされたような感覚。今いるところはジョウト地方というらしい。ほかにホウエン地方という場所があるらしいが、どちらか聞いたことがない。やはりカントー地方そこに行けば家に帰れるかもしれない。

おじいさんに礼を言ってタウンマップを返そうとすると、いつかまたここに寄った時に返してくれればいいと言ってタウンマップを貸してくれた。有り難くお借りすることにした。

「行くあてがないなら、とりあえずコガネの街に行ったらどうかの？あそこはジョウト一番の都会じゃし、何か手がかりも見つかるかもしれん」

おじいさんの指差す先に、遠く、高層ビルと電波塔がそびえ立っているのがかすかに見えた。

コガネシティ

景品交換所の鍵を開けて、棚にいらんだモンスターボールに挨拶をするのがわたしの毎朝の日課である。

「おはよう。ケーシィ」

ケーシィという名前のそのポケモンは小さく頷いたように見えた。

わたしがここ、コガネシティにやって来て一カ月ほどたった。コガネに着いたわたしはまず、当面の生活費を稼ぐために仕事を探した。コガネシティは大都市である。幸いなことに仕事はすぐに見つかった。ゲームコーナーでコインと景品を交換する係員のバイトだ。右も左もわからない世界での生活はあつという間に過ぎていった。まさに光陰矢の如し。

家に帰る手がかりは見つからなかったが、働きながらわかったことがひとつだけある。

この世界はどうやらわたしの元いた世界とは違う世界かもしれないということだ。

その事実をわたしにまざまざと知らしめたのは、『ポケットモンスター』…縮めて『ポケモン』という存在だった。

この世界に住んでいる人たちは当たり前のようにポケモンと呼ばれる生き物と一緒に暮らしている。

ポケモンは世界に数百もの種類が存在し、人々はそのポケモンをペットのように可愛がったり、仕事のパートナーとして一緒に働いたりしている。ポケモン同士を闘わせる競技のようなものも存在するらしい。人々はポケモンを『モンスターボール』というカプセルに入れて持ち歩く。その手軽さのためか、ポケモンは子どもからお年

寄りまで老若男女さまざまな世代の人たちに親しまれている。

わたしはポケモンなんて知らない。

わたしの世界にそんな生き物いなかった。よってこの世界はわたしの住んでいた世界とはまったく別次元の世界だという認識をせざるを得なかった。

と、いうことはつまり『カントー地方』もわたしの知っている『関東地方』とはまったくの別物である可能性が高い。しかしわたしは希望を捨てなかった。そんなの実際に行ってみないとわからないじゃないか。とりあえず今はゲームコーナーのバイトを続けてカントーに行くお金を貯めようと思う。行ってみて、やっぱり違ったら、そのときはそのときで、またそこから考えればいいや。

そんなふうに気楽に考えられるくらいわたしはこの世界の生活に慣れてきていた。そしてやっぱりそれにはポケモンの存在が大きく影響していた。

いつの間にかわたしは、この世界の人たちと同じようにポケモンに親しみを感じていたのだ。

ゲームコーナー

「おはよう、ケーシィ。今日こそ誰かにもらってもらえるといいね」
今日も毎朝の日課でわたしの一日が始まる。

景品交換所はコガネの街の繁華街、カラフルなネオン輝くゲームコーナーの中に併設されている。

ゲームコーナーにはスロットがあり、お客さんはそのスロットで稼いだコインをこの景品交換所で目当ての景品と交換するのだ。まあ、わたしの世界でいうパチンコみたいなものだと思う。だが、あくまでゲームなので小さな子どもでも遊べるところがパチンコとは違う。『安心・健全・街のみんなの遊び場』というキャッチコピーで街一番の娯楽施設になっている。

景品はグッズやポケモンバトル用のアイテムなど、ほとんどがポケモン関連のものである。そしてなんと、ポケモン自体も景品として棚に並べられているのだ。はじめて見たときはとても驚いた。生き物を景品にして大丈夫なのだろうか。愛護団体的な組織が反対運動に押し付けてきたりしたらどうしようと不安だったが結局は杞憂だった。それどころか景品のポケモンにはとても珍しくなかなか手に入らない種類がいるらしく、そのポケモンが目当てのお客さんはみんな血眼になってコインを集めていた。珍しいだけに必要なコインはちょっとやそつとの枚数ではない。この一カ月だけでいったい何人のポケモントレーナーがコインが足りずに泣く泣くスロットの台にとんぼ返りしていったか。両手両足の指では数え切れないだろう。そんなふうに誰もが欲しがる大人気のポケモンもいれば、なかなかもらい手が現れないポケモンもいる。

それがわたしは毎朝ボール越しに話しかけているケーシイだ。
店長曰わく、育てば強いポケモンになるらしいが、はじめのうちは技（ポケモンは技を覚えて攻撃したり自分の身を守ったりする）を一つしか覚えられないので育てるのが難しく、なかなか欲しがる人がいないのだそうだ。そんなわけで他の景品のポケモンたちが次々にもらわれていくなか、いつもケーシイだけはひとりぼっちで取り残されていた。そんなひとりぼっちの境遇がなんだか自分の置かれていた状況とダブリ、わたしは毎朝ケーシイに話しかけるようになったのだ。ボール越しのコミュニケーションだったが、いつも眠そうに身体を丸めているケーシイもだんだん反応を返してくれるようになった。気づけばわたしはケーシイを可愛いと思うようになっていた。

しかし、別れは突然やってきた。

コインケースをパンパンにしたトレーナーがポケモングッズを交換した残りのコインとケーシイを交換していったのだ。寂しかったが、可愛がってくれるトレーナーと一緒にいることがケーシイの幸せなんだと自分に言い聞かせ、笑顔で送り出した。
ところが、予想外の出来事が起こった。

「あの、さっきコインとケーシイを交換してもらった者なんですけど…」

なんと、さっきのトレーナーが一時間もしないうちに戻ってきて、やっぱりケーシイを返すと言ってきたのだ。

どうしたらいいか分からず対応に困っていると、トレーナーは「コインもいりません！」と言ってケーシイ入りのモンスターボールを置いて逃げるように帰ってしまった。

店長を呼んで事情を話すと、店長はモンスターボールの中のケーシ

イを眺めながら、やれやれと溜め息を吐いた。

「もしかしたらこのケーシイは目当ての特性と性格じゃなかったのかもしれないなあ……」

「特性……？性格……？」

首を傾げていると、店長が察したように説明してくれた。

「そういえば君はポケモンを持っていないんだっただね。ポケモンには特性と性格というものがあるんだよ。同じ種類のポケモンでもそれぞれ持つて生まれた特性も性格も違う。言ってみれば個性みたいなものだね。バトルに有利に働く特性もあれば、逆に不利になってしまう特性もある。攻撃力が上がりやすい性格もあれば、防御力が上がりやすい性格もあるみたいな感じにいるいるなんだ」

「なるほど……」

「だから困ったことに、たまーにいるんだよね。野生のポケモンを捕まえても欲しかった特性じゃなかったからすぐに逃がす無責任なトレーナーがさ」

「それじゃあ、このケーシイも……？」

「うーん……もしかしたらそうなのかもなあ……」

「そんな……」

バトルに役立たないから捨ててしまうなんて。そんなトレーナーの勝手な都合で、このケーシイはまたひとりぼっちになってしまったのだ。

ボールの中のケーシイはいつも以上に寂しそうに見えた。

「ねえ、君、ポケモン持ってないんだよね？」

出し抜けに聞かれた唐突な店長の言葉に、思わず「え？」と聞き返

してしまうところだったが、すんでのところで口を噤んで頷いた。

「それじゃあこのケーシィ、君がもらってくれないかな？」

「ええっ!？」

突然の提案に、今度こそわたしは驚きの声をあげた。

「見たところこのケーシィも君に懐いているようだし、そうしても
らえると助かるんだけど…。」

そんなわけで、ケーシィのもらい手は無事に見つかった。
わたしは生まれてはじめて自分のポケモンをもった。

マサキのいえ

ゲームコーナーのバイトが休みの日、わたしはケーシイを連れてコガネの街や街の郊外にある自然公園を歩いた。

ボールから出たケーシイはわたしの後ろをふわふわと宙に浮かびながらついてくる。クリーム色のエイリアンのような身体が宙に浮いて漂っている姿は、はじめは異様な感じがするが、見慣れるとなかなか愛嬌があつて可愛い。ケーシイもボールのなかにいるよりも嬉しそうに見えた。

ケーシイをもらつてから勉強したことだが、ポケモンには特性や性格以外にも、タイプというものがある。性格とは違い、タイプはそれぞれの種類で統一されているポケモンの属性のようなものだ。

例えば、空を飛ぶポケモンは『ひこうタイプ』、海や川に棲むポケモンは『みずタイプ』というように、この世界にはいろいろなタイプのポケモンが生息しているらしい。

ケーシイはエスパータイプのポケモンだ。エスパータイプは超能力パワーを使えるという。だからこんなふうに念力のように身体を浮かせてわたしの後をついてくることができるのだ。

ケーシイのおかげでわたしは寂しくなくなったが、問題はわたしの仕事中にケーシイがボールのなかでひとりぼっちになってしまうことだった。今までずっと寂しい思いをしてきた子だ。これからはできるだけそんな気持ちにはさせたくない。

聞くところによると、ポケモンは一人のトレーナーにつき6匹まで手持ちに入れることができるそうなので、ケーシイに仲間をつくつてあげることでもある。しかし、ポケモンをゲットするためには野生のポケモンがいる草むらに入らなければならない。そして必

要に応じてポケモンを弱らせたり、麻痺や眠りなど、状態異常にしてからモンスターボールを投げないとゲットできないらしい。果たしてそんなことがわたしにできるのだろうか？

コガネシティの名所・ラジオ塔の前まで来ると、ケーシーが空中でくるくると回転し始めた。きつとラジオ塔の発する電波に反応したのだろう。

クスクス笑ってその姿を眺めていると、ラジオ塔の入口に一枚のポスターが貼られているのが目にとまった。

『ポケモン譲ります』

さつそくポスターに書かれていた住所を訪ねると、民家から出てきたのは茶色の髪をした陽気な青年だった。

「いやあ〜実はイーブイのタマゴがふえすぎてしもてなあ。わいだけじゃ手に負えなくなっしてしもて困ってたんや。姉さんもろてくれるんやろ？ ホンマに？ 助かるわあ！ おーきに！ あ、申し遅れたけど、わいはマサキっちゅーもんや。このへんの奴らからはポケモンマニア呼ばれとる。どーぞよしなに！ そんなでな、さつそくやけどこいつが姉さんにもろてほしいイーブイや！ イーブイでは珍しいやで。可愛がってやってな！ ホンマおーきに！」

マサキさんは怒涛のマシンガントークでたたみかけ、イーブイというポケモンの入ったボールをわたしに手渡すと通信システムのメンテナンスの件で忙しいとかせっかく実家に帰ってきてるのに云々と

何やら早口に言っすぐ家にのなかに戻っていった。

呆気に取られてしばらく呆然としてしまったが、いつまでもマサキさんの家の前に突っ立っていても仕方がないので、とりあえず自然公園に移動してボールからイーブイを出してあげた。

ポン！と軽い音を立ててモンスターボールから現れたイーブイは、茶色いふわふわした毛皮に包まれていた。ぬいぐるみのような、愛らしい容姿で、まるで大きな瞳がキラキラと輝いている。尻尾もふんわりと膨らんでいて、顔をうずめたらとても気持ちよさそうだった。ケーシイも可愛いと思うが、このイーブイはなんとというか、万人受けしそうな可愛さだ。

「よろしくね、イーブイ」

抱っこしようと手を伸ばしたら、思いつきりそっぽを向かれた。見た目の愛らしさとは裏腹に、このイーブイはどうやら気難しい性格のようだった。

しぜんじつえん

マサキさんから譲り受けたイーブイはわたしの言うことを聞かず、隙あらば勝手に逃走を図るので仕方なくボールに戻した。本当はケーシイと同じようにボールの外に出して連れ歩きたかったが、断念せざるを得なかった。

これじゃあケーシイと遊ばせるのはいつになるやら…当分先の出来事になりそうだ。

ケーシイと一緒に花壇の前のベンチに腰掛け、日向ぼっこをしていると、ミニスカートの女の子に話しかけられた。

「ねえ、あたしとポケモンバトルしない？」

バトルはやったことがないので断ると、女の子はわたしの隣に座ってうとうとしているケーシイを見て残念そうに言った。

「そっかー。あなたのケーシイ、レポートしか覚えてなさそうだもんね。じゃあ、バトルができるようになったらあたしとポケモンバトルしてね！いつでも連絡待ってるから！」

そう言ってポケギア（ケータイ電話のようなもの）の番号をメモして渡してくれたが、生憎わたしはポケギアを持っていないので連絡手段がない。

ミニスカートちゃんが去ったあとで、わたしは店長の言葉を思い出していた。

「レポートか…」

店長に教えてもらったのだが、このケーシィは『レポート』という技を覚えているらしい。というか、むしろそれしか覚えていないらしい。ミニスカートちゃんに言われたとおりだった。

レポートはその名のとおり、瞬間移動できる技だという。バトル以外で使うと、近くのポケモンセンターまでトレーナーを連れて一瞬で移動できるので、とても便利な技だと店長から聞いていた。ポケモンセンターとはポケモン専用の医療施設とでもいおうか、ケガをしたりバトルで疲れたポケモンの回復や治療をしてくれるところだ。ゲームコーナーの近くに建っているので毎日見慣れてはいたが、わたしは一度も行ったことがなかった。

もしかしたらいい機会かもしれない。せっかく便利に技を覚えているのだから、ちょっと使ってみよう。

わたしはケーシィの手を握り、ドキドキしながら技を命じた。

「ケーシィ、レポート」

瞬間、身体がフツと軽くなり一瞬だけ宙に浮いたような、奇妙な浮遊感がした。しかしすぐにその感覚は消え去り、重量が戻ってきた。思わず瞑ってしまっていた目を開くと、目の前に袴姿の男の子が立っ
つていて、酷く驚いたような顔でこちらを凝視していた。

キキヨウジム

辺りを見回して、どう考えても違つと本能が告げていたが、万が一のこともあるかもしれないと思い、一応尋ねてみた。

「ここってポケモンセンターですか？」

「えっ…ここはポケモンジムですけど。キキヨウジム」

「キキヨウ!?」

予想外の返答に慌てておじいさんから借りているタウンマップを取り出して確認する。

キキヨウ、キキヨウ…あつた!キキヨウシティ!

地図を見ると、何故かケーシィとわたしはコガネシティからずっと東にあるキキヨウシティという街にワープしてしまつたらしい。最寄りのポケモンセンターまでレポートする技だつたはずなのに、どうしてこうなつたのか。

首を傾げていると、袴姿の男の子が納得したように言った。

「もしかして、あなた挑戦者ですか?さつきはいきなり現れたからびっくりしたけど…それなら話は早い。さっそくバトルしましょう!」

「えっ?バトルって…」

「おれはキキヨウジムのジムリーダー、ハヤト!ひこうタイプのエキスパート!いざ、尋常に勝負ッ!」

「えっ!?ちよ…えええ!?!」

あれよあれよという間にポケモンバトルが始まつてしまった。もうわけが分からない。

ハヤトと名乗った男の子がモンスターボールを投げると、中から鳥型のポケモンが颯爽と登場して、素早い動きでわたしとケーシイの周りを飛び回って翻弄した。

とっさにケーシイにテレポートを命じたが、テレポートはバトルではまったく役に立たなかった。そうこうしているうちにケーシイが鳥ポケモンの体当たりを受けてしまい、慌ててボールに戻す。するとその瞬間、ポケットに入れていたもう一つのボールが揺れたかと思うと、ポン！と音を立てた。

「イーブイ!？」

なんとイーブイが勝手にボールから出てきたのだ。すぐに鳥ポケモンの標的が変わり、イーブイ目掛けて突進してくる。

「よけて！イーブイ！」

しかしイーブイはわたしの命令を聞かず、ケーシイと同じように体当たりをまともにくらってしまった。そして続けざまに大きな翼で叩かれ、機嫌を損ねたのかまた勝手にボールに戻っていつてしまった。

こうしてわたしの初のポケモンバトルは散々な結果に終わったのだ。

キキョウジム？

「えっ、挑戦者じゃない!？」

「はい…」

涙目で事情を説明したら、袴姿の男の子、ハヤトくんがポケモンバトルの基礎やポケモンジムについて教えてくれることになった。

ハヤトくんの説明によると、ポケモンジムとは、ポケモントレーナーがバトルの実力を試す道場のような施設だという。

ポケモンリーグ協会から認可を受けたポケモンジムは、ジムリーダーと呼ばれる代表者によって管理されており、そのジムリーダーに勝利し、実力を認められたトレーナーには公認ジムバッジが授与される。そして各街のジムリーダーに勝利し、8つのバッジを集めきったトレーナーだけが、ポケモンバトルの最高峰といわれるポケモンリーグに挑戦できる資格を得るのだという。言うなれば、ポケモンジムとはポケモンバトルを極めるトレーナーにとつての登龍門というわけだ。

ハヤトくんもそんなジムリーダーの一人で、彼はキキョウシティのキキョウジムで、毎日のようにバトルを挑んでくるトレーナーたちを迎え撃ち互いに切磋琢磨しているのだ。そんなポケモンバトルの実力者に、バトルど素人のわたしがまともに闘えるわけがなかった。本当なら勝負を挑むことすらおこがましいのだが、どういうわけかケイシイのテレポートが原因で手合わせすることになってしまったのだ。

そういえば、コガネシティにもジムがあつたような気がする。ジムリーダーはどんな人なんだろうか。今まではまったく興味がなかったが、ハヤトくんの話を聞いて少し気になり始めた。

「ところで、さっきのイーブイは人からもらったポケモンですか？」
「はい。今日譲ってもらったばかりのポケモンで、まだ全然懐いてなくて…」

さっきのバトルでもわたしに懐いていなかったから言うことを聞いてくれなかったのかと思ったが、どうやらそうではないらしい。人からもらったポケモンはレベルが高いと新しいトレーナーの命令を無視してしまうことがあるのだという。

レベルというのは、ポケモンの強さを表す数値のようなものであり、一般的にこの数値が高いポケモンほどバトルに強いとされる。野生のポケモンを倒したり、トレーナーとのバトルに勝利したりすると経験値がもらえ、その経験値をためることでレベルが上がる。トレーナーたちはポケモンのレベルを上げるためにトレーニングをしてバトルの腕を磨いているのだ。

「今は命令を無視するかもしれないけど、あなたにトレーナーとして実力がつけば、自然に言うことを聞いてくれるようになると思います。ケーシイもレポート以外の技を覚えたり進化すれば強くなるし、きつとあなたも強いトレーナーになれますよ！」
「そうでしょうか…」

わたしが強いトレーナーに…。そう言われてもいまいちピンとこない。

「手持ちのポケモンは全部で6匹まで持てるので、あとはもっとポケモンをゲットすることですね」

「ゲット、ですか」

「はい。おれはひこうタイプのジムリーダーだから、鳥ポケモンを育ててますけど、ふつうはいろいろなタイプをバランスよく育てるのが理想かな。ああ、でも、ひこうタイプはオススメですよ！」

それからはハヤトくんによる鳥ポケモンの魅力紹介コーナーになってしまった。翼のフォルムがどうのこうの肩にとまって毛繕いしてる姿が云々と、ひこうタイプのポケモンがいかに華麗で美しいかの話が永遠に続く。

「あ…す、すみませんすっかり話し込んでしまっ…！こいつらは父さんからもらった大切なポケモンだから、つい熱くなってしまいました。ちなみにこのポツポはピジョンに、ピジョンはさらにもう一段階進化するんですよ。ピジョットっていう、すごく綺麗で大きな鳥ポケモンなんです」

ピジョットか。どんなポケモンなんだろう。

ぜひ見てみたいと思ったが、生憎ハヤトくんの手持ちにはいないらしい。

「ポツポをゲットして育てればいいですよ。ポツポならすぐ近くの31番道路にたくさんいるし…あ、そうだ！突然バトルを仕掛けてしまったお詫びに、これをどうぞ！」

差し出されたのは、中身の入っていない空のモンスターボール。

「野生のポケモンはゲットしたことがないんですよ？草むらからポケモンが飛び出してきたらこのボールを投げてみてください。ポツポなら比較的簡単に捕まえられると思いますよ」

そんなわけで、コガネシティに帰る前に31番道路へ寄り道するこ
とにした。

キキヨウシティ

「モンスターボール、ありがとうございます。頑張ってポツポをゲットしてみます」

いろいろお世話になったハヤトくんにお礼を言う。そのまますぐに出発しようとして一度は背を向けたが、立ち去り際、もう一度ハヤトくんの方へ振り返った。

「もしもわたしが強いトレーナーになれば、その時はもう一度バトルしてくれますか」

ハヤトくんは一瞬目を見張ったが、すぐに「もちろん」と笑顔を返してくれた。

ジムの外に出ると、そこはキキヨウシティ。

昔の古い街並みを残したような家屋が建ち並んでおり、街の北側には古めかしい塔が街を見守るようにそびえ立っていた。タウンマップによると、あれは『マダツボミのとう』というらしい。

さて、31番道路までは歩いてすぐのようだが、その前に確かめておかないといけないことがある。

わたしはケーシィをボールから出した。ハヤトくんのポツポから体当たりを受けていたが、わたしがすぐにボールへ戻したためかダメージも少ないようだ。ボールから出れて嬉しいのか長い尻尾をユラリと振っている。

そもそもわたしがこんなところに来てしまったのは、どう考えても

ケーシイのテレポートのせいである。テレポートは近くの街のポケモンセンターへ移動する技だと聞いていたが、それが何故キキョウシテイのポケモンジムなどという突拍子のない場所にワープしてしまっただのか。

だから、わたしはもう一度試してみる必要があるのだ。

街中を見回し、ポケモンセンターの屋根を見つけると、ケーシイにそこを指差して言った。

「ケーシイ、あつちにポケモンセンターが見えるよね？そこまでテレポート！」

フツと身体が軽くなる感覚。

次の瞬間、強い風を感じて身体がぐらりと揺れた。

「え………？」

何事かと目を開けて、その光景に絶句した。
わたしは空の上にあった。

スズのとう

あまりの高さに膝がガクガクと震えて思わずその場にしゃがみこんでしまった。

遙か眼下にミニチュア模型のような街並みが見えた。どうやらわたしがいる場所はものすごく高い塔の天辺らしかった。頭頂部が踊り場のようになっていて、やけに広いスペースがある。

一瞬ここはマダツボミの塔かと思ったが、すぐに違うことが分かった。

それほど遠くない距離にコガネのラジオ塔が見える。と、いうことは位置関係から考えてここは 強風に飛ばされないよう細心の注意をはらってタウンマップを取り出し、紙面の上の街を指でなぞる。ここはコガネの北にある街、エンジュシティで間違いない。エンジュには塔が二つあるが、片方の塔は火事で焼けてしまったとあるので、必然的にここはスズの塔ということになる。

キキョウのポケモンセンターに行くはずだったのに、どうしてこんな標高nメートルもある塔の天辺にいるのか。

わたしは、隣でとぼけた顔をしているケーシイを見た。

「もしかしてあなたって方向音痴…？」

ケーシイはわたしの言葉を理解しているのかいないのか、くいつと首を傾げた。

疑問は確信へと変わる。

この子は方向音痴なんだ！ それも、重度の。

今さらながら、あの時コインとケーシイを交換したトレーナーがすぐにケーシイを返しにきた理由がわかったような気がしたが、わたしにとってはそんなことはどうでもいい問題だ。

今はここからどうやって下に降りるかを考えなくては。

高さに怯えながら知恵を振り絞っていたその時、ふいに今までに感じたことのないような風が吹いた。バサツバサツと羽音が聞こえて振り向くと、わたしの後ろに一羽の巨大な鳥ポケモンが舞い降りていた。

その翼は虹色に輝き、立派な嘴は威風堂々とした風格があった。わたしはその神々しいまでの美しさにすっかり魅せられていた。鳥ポケモンはわたしの存在などまったく意に介さず、悠々と鎮座していた。

ハヤトくんの言葉を思い出す。

『ポッポはピジョンに、ピジョンはさらにもう一段階進化するんですよ。ピジョットっていう、すごく綺麗で大きな鳥ポケモンなんです』

もしかしてこのポケモンがハヤトくんの言っていたピジョットなのだろうか。

なんとなく違うような気がしたが、わたしはハヤトくんからもらった空のモンスターボールを取り出した。

『ポケモンが飛び出してきたらこのボールを投げてみてください』

言われた通りにモンスターボールを投げる。

わたしの手から放たれたモンスターボールは放物線を描き、ピジョットのお腹のあたりにポンと当たると、一瞬にして巨大なピジョットの身体を飲み込んでいた。ボールはしばらく小刻みに揺れていたが、見守っているうちに動かなくなった。

動かなくなったモンスターボールをおっかなびっくりに拾い上げる。

これは、ゲット成功とみていいのだろうか。

ボールの開閉スイッチを押すと、なかからピジヨットが飛び出してきた。ピジヨットはいきなりボールのなかに閉じ込められたというのに一切暴れることなくおとなしかった。

「あの……よろしくね？」

話しかけてみても鳴き声を上げることなかった。

どうやらこのピジヨットは威厳たつぷりの見た目とは裏腹に穏やかな性格らしかった。どこかのイーブイとは大違いだと思っっていると、それに抗議するようにポケットのボールがガタガタと揺れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2225z/>

Role Playing Girl!!

2011年12月8日00時57分発行